

第 17 回ホルモンと癌研究会にてストレスと女性ホルモンに関する研究を発表しました (2016/6/24-25)

テーマ：ストレスと女性ホルモン
 場所：倉敷アイビースクエア（岡山県倉敷市）

災害産婦人科学分野の研究の一つである「災害ストレスと婦人科疾患」について、当研究所の三木康宏 講師（災害医学研究部門 災害産婦人科学分野／災害と健康ユニット）が、第 17 回ホルモンと癌研究会にて発表しました（下記）。

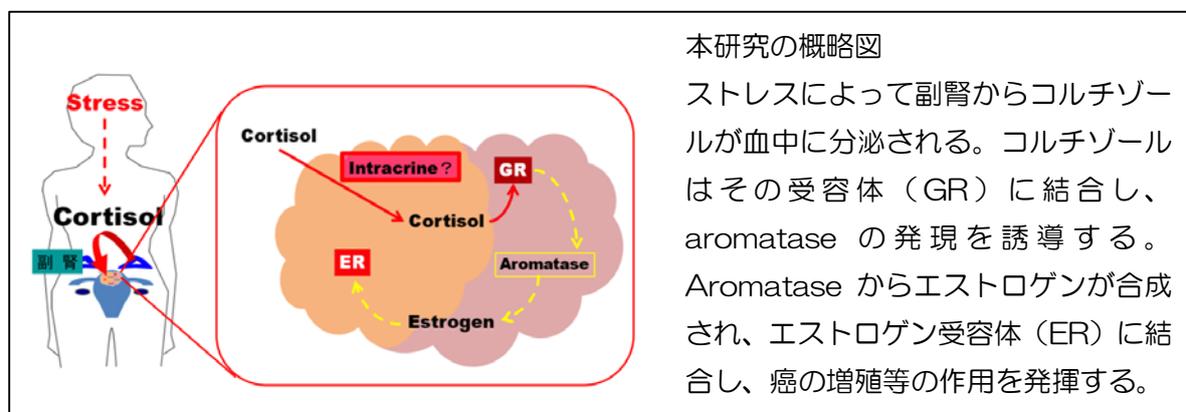
演題：子宮内膜癌組織におけるコルチゾールによる aromatase の誘導

演者：三木康宏、笛 未崎、高木清司、鈴木 貴、笹野公伸、伊藤 潔

（下線は当研究所 災害医学研究部門 災害産婦人科学分野所属）

女性ホルモンは閉経前では卵巣から分泌されますが、閉経以降では脂肪等の臓器で合成されることが知られています。代表的な女性ホルモンであるエストロゲンの合成に関わっている重要な酵素が aromatase（アロマトラーゼ）で、副腎から分泌される微弱な男性ホルモン作用を有する前駆ホルモンからエストロゲンを合成します。乳癌や子宮内膜癌はエストロゲンによって増殖することが知られています。これらの癌においても aromatase が存在することで、エストロゲンを癌細胞自体が自給自足する形で悪影響をおよぼすと考えられており、特に乳癌では aromatase を阻害する薬物療法が確立されています。今回、この aromatase がストレスホルモンであるコルチゾールによって誘導されることを初めて明らかにすることができました。

災害ストレス（被災そのもののストレスやその後の生活環境の変化によるストレスを指します）が女性の健康に影響をおよぼすことが考えられています。本研究成果は、ストレスホルモンが女性ホルモンのバランスを崩す可能性を意味しています。今回の研究では子宮内膜癌を対象としましたが、この結果が正常組織においても当てはまるのかどうか、今後、更に研究を進め、広く女性ホルモンと健康に関する情報を発信していきたいと考えています。



文責：三木康宏（災害医学研究部門／災害と健康ユニット）